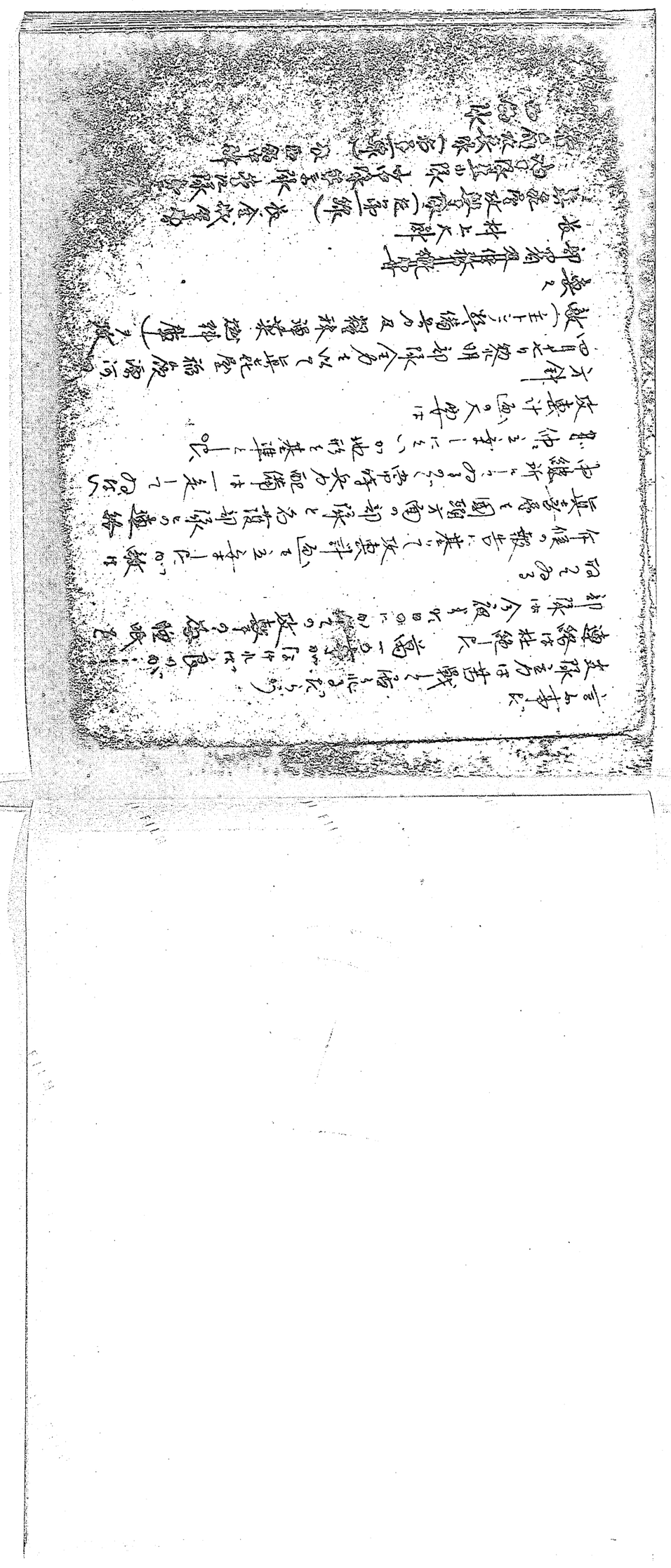


源河攻撃隊（右側援護隊）　長　古場中尉
　防衛隊　攻撃班
擲弾筒小隊（長　首藤軍曹）
　各隊抽出擲弾筒手
予備隊（長　松谷伍長）
　本部小隊・鉄血勤皇隊
各隊ノ任務ノ概要

1、真壁屋攻撃隊
　真壁部落内敵ノ掃蕩　部落南側[illegible]
　燃料庫ノ攻撃
2、稲嶺攻撃隊
　稲嶺部落内掃蕩特ニ部落北側砲兵陣地　同弾薬集積
所ノ攻撃
3、源河攻撃隊
　源河橋梁ノ爆破及北部地区ヨリノ増援遮断　古堅隊
4、擲弾筒小隊
　主トシテ真壁屋攻撃隊ニ協力

以上終

日ハ暮れも近い　さあ出発だ
英霊を葬ってから本部を進撃するに際し
見ると未だ日は高い　陣線に於て
豫定の集結地点に来たが各隊は集合の為に
「少し早や過ぎたね　若干休憩しよう」

[illegible]に信祭を誘導を配置した
二十時頃、[illegible]全安集結完了した（この地点
が出発準備等の行動の後期に関係であろう）
出発の際の輸送[illegible]命令を下達し開始の行動
について打合せを[illegible]皆熱意を[illegible]開始している
特に稲倉長老屋附近の地形や敵状判断に重点を
置いた　防衛隊は全部生地なので源河公事者三名
も配属した
（サン義よりと思ったが次丸と留隊をで伸々義れない
まだ少し時間がある）
出発まで未だ少し時間がある
地神酒を戴いた　出発の輕裝の斬込次女の慣道
兵達は白鉢巻を締め
端でもう喝を入て、ある
武者は英靈に奉祭して決意を新にしてある特に
西銘隊の者は出発地が同郷であり且又以前
同じく遊撃備隊に勤務してゐた為ら戰場を異にして
彼等であるの故為も深い思慕を寄せて
ある　必ず仇は取る　仇討の道章だ
（数つた）
二十三時防衛隊は出發した　諸久川に添って北上
源河右岸に進出する隊是である。

各隊集結地点を更に偵察し誘導兵を配置
二十時頃に於て全兵集結完了し、（山の地形
や出発準備等の打合に関係しない関係であろう）
各隊の幹部を集めて命令を下達し細部の行動
について打合せをした　皆異意を以て研究してゐる
特に福嶺眞長屋附近の地形や敵状判断に重点を
置いた　防御隊は全部生地なので源河出身者三名
を配属した
（少し疲ようと思ったが大丈夫と言張るので仲々疲れない）
（未だ少し時間がある）
出発まで
出物酒を戴いた
兵隊は白鉢巻を締め軽装の新込姿の儘道
端でむろ鳴を立て、待機してゐる。
武者は姿勢に本部に対して決意を新たにしてゐる特に
飯隊の者は岸本や屋部の同郷であり且又以前
に上之兵隊に勤務してゐた為に戰場に出発に
仮装の多の遊嘉も深い思慕を寄せて
ゐる　必ず仇は取る　仇討の道章に
第三隊防衛隊は出発し新入りに添ふ兵也
後河端岸に進発する筈である。

西銘中隊が本攻撃に際し右側隊「方は可いが左「仲尾」
次方面より来る敵の逆襲を考慮して「新大川」に
橋梁を攻撃開始と同時に爆破するを要すと意
見具申をした（此の橋は戦斗（上陸）開始以前に破壊
する豫定であったのが敵の進撃速度が意外に早や
かったので遂に機会を失っておったものである）
確かに有力な一案である最初の計画は飽くまでも敵を
ほめ過ぎた感がある　大事をとらねばならぬ……
と言っても現在手持ちには爆薬の豫備がないので
傳令に命令を持たせて曹江隊前進據点に方
かせた　「前夜就行日に押入」
二十四時主力は行動を開始した
西銘隊を先兵とし護衛隊は本隊である
暫く前進したが急に先頭が停止をした　先頭の
方にもとと
もう少し後来るとし、飽り早くかり過ぎると先敵
まかも知れません　今丁度うちの攻撃線が稍前を

攻撃成功と事にのべ説を聞いて居りますと
話によると敵は眞魯屋稲山領東側山麓と中腹
の線に堅固な戦線を張ってゐる特に眞魯屋の神社
附近は地形人と雖も通過を許さない稲山領は農耕地
約五六十名部落北側砲兵陣地附近には高射砲
二門車輌六兵員約四五十名と弾薬の二ヶ所に分
て其新の様に積んであると彼は本日設後最も遠く敵の
殿な稲山領南側より潜入部落に糧秣を取りに帰
ゐる住民から細部の状況を聞いた(住民の一部は常時
部落に生活してゐる)そして爆薬を抱いて敵の入ってゐ
民家の床下に潜入したのというても点火しない上に
慣てゐる敵に乱伏かれたので爆薬を其の
位にして逃げ出し手榴弾を投擲して四名を倒した
――――
海岸眞魯屋より諸谷川に達する山道の支又点附近の
[illegible]

山の松林から出た。安心した距離からしてまだ兵舎は遠いだろ
と思ってこの部隊も停止。伴の兵舎屋神社附近を偵察させた
所まで歩いて休憩しようと思って横になろうとしたが先程
からの行軍で汗が出たのと被服掻くの為元の芋蘚が蓋
痛む。已むを得ずまったく休憩
前方遠く我に対した兵が未だ目的地までは遠かい
三時頃であろう早く安心なければ大時の展開完了まで
に間に合はぬ……と心は焦り出したが静粛力進中で
あまけに一列縦隊であるので仲々思ふ様には行かぬ
東の空はぼうと白み出した。月が出るのだらうかと思
ってゐたが違からーい夜明けなのだ
次第に前兵の顔も分る様になった
「歩度を伸ばせ！」……今日が所期の成果
は収められない
自隊のみならば何とかなるが各隊協力で攻撃するのである
から時間の遅ひは攻撃不成功の因となるのだ
蒸焦り出した。遂に隊長は先頭になって歩き出した
黎明の中期となったが予定の展開線に着かない
黎明の末期が迫って来た時遂に目標を確認し得る

所まで進出し得た……が各隊約束の時分も
若き超過したらしいのつく急いで部署をした
先づ擲弾筒を陣地に進入せしめて射撃準備
到着する各隊を當初の計画に基いて今進ませ
概ね目標方向に(進前)したのを確認した時
攻撃開始の信号射撃……擲弾筒で真走る
教所を射撃(試射)
敵情は……
射撃開始と同時に各隊は攻撃前進をした
稲荷方向では友軍の射撃音丈けで敵の姿って
みるとは思はれない 亦真昼でも當初曳光弾が
三四発流れた切りで静かなものだ 問題の神社の
森も何のこはない(部隊の攻撃に移る時逃げたらしい)
下を見ると比嘉伍長の小隊たらう……
あゝ……と照屋と二人顔を見合はせて笑ふこともなく
何と言ふこともなく……全く開いた口が塞がらない
といふのは即ち彼の小隊の攻撃振りが余りにも
傑作だったからである
即ち小隊長の後に兵隊になって一列縦隊で

そして小隊長が敵の居ると思はれる方向に向つて攻撃を
命じたらしく腕を一寸その方向に動かしたならば一ケ分
隊（当時は二名位）位の兵力か銃剣や竹槍を持つて
全然敵の居ない様な小高い台地になつた畑に「ヤアー！！」と
突込んでゆく「ではないか！
「隊長殿 あれは 丸で初年兵の演習ですね」
「う、ん……」 暫ー、沈黙……これぞ果して攻撃出来るやう
其の時 中隊はもう絶対に大部隊を以て畫策こん
ぽ攻撃ばーないと決心ーに（部隊の素質に徳ず
る戰車をーなくては奏功ーない）
擲弾筒は試射をーたる後陣地を為す移動ーに
左第一線は部落内に入り込んだらしいので MW は一時射
向を右第一線の正面に向けに 続いて稲山領校に射弾
集中ーに
初めて射撃する初年兵にとつて MW 程面白いものはない
無茶苦茶に吳令も命令も何も聞かずに撃つて
ゐる

頭上でズシーンと至近弾が落ちて来たが
八〇と見ると川の陣地の側の松の枝が落ちて来たのだ
認めた
部落に突入した部隊は一部部落の西側に廻り
出て来らしいので豫備隊を前線に加入せしめた
部落内のあちこちで盛勢よく煙が上って来た
部落に残存してゐた敵もたまらなくなつて逃げ出
した 相互の火戦は次第に激烈となって来た
部落南側に一部と主力は奥島に渡る手前の
海岸護岸の線に退いて最後の抵抗をするらしい
部隊の兵達は戰斗技術こそ拙いが
もう怖ーさといふものを超越して
南方敵におそれる
部落は煙の中では彼我入り乱れて全く昔の運動
會や鬼ごっこを撃戦とさせる様だ
本部の指揮班の連中が手を拍いて「ブオブオ」と
言を叱んでゐる 凸入諸位長が遂にたまらなく
なつて是非出して下さいと指揮班の一部を辛ねて
飛出してしまつた

愈々攻撃手に油が乗って来た

目標にしてゐた燃料庫は大上させた

稲嶺方向に弾薬庫を攻撃成功したらしい音が聞える

第一線は逃げる敵を追って海岸の線まで達した時敵の

頑強な抵抗にぶつかった第二線はもう既に山脚より

約一粁遠進出し右翼端までは三粁弱

にまで拡がって一まとまり攻撃力のない所へ更に攻撃力は

もともと弱化した

稲嶺方向は数條の黒煙と時々聞える機銃音以外

に戦斗は終ったかも知れない

住民が家財道具を持って逃げて来た豚や馬が

飛び出して野原を走り回っている

今頃（戦斗開始以来旬日を出てない）住民が部落に居る

つは以ての外だ 敵に利用される家ならば全部

一軒の函屋と雖も敵に安眠を許さぬ

焼いて一まふ方が良い

糧秣庫の右側に爆煙が上ったが若干現形が崩れた

住で大して効果はなかった

左第一線の左翼隊から仲尾次より戦車三！と報告

眼鏡とおして見ると整然たる部隊である
彼等は櫻林を後方の陣地に集結し然る後前
進を開始する
擲弾筒は……
重機は……
先ず左手沖には、首尾線前に出ている
筈である。元来連絡は、重機の連絡は十分
だが左翼の我が部隊は力を一杯出す事の様子
機の為に一切の事実に 傳令と飛行機
動員隊及び人員輸送機が三回に亘って被害を
受ける前進を未だ止め報告がない
左翼線の小隊の一部分は敵の逆襲に
再び攻撃に出る
彼等の攻撃時間は三十分間で敵の一時間と
完全に超える
戦場の上空では観測機が飛ぶ
機関銃と決して小隊を横一に見ると大分足り
ない MW は約六倍の小隊数が行方不明この傷は
どうしても帰還、捜索をねばならぬ

敵は包囲網を逐次圧縮して来た　退路も遮断したらし
左翼方面からの軽迫弾の増した　本弾丸の音も近へ
愈て山に上って来るかも知れない
「田井峯方面に大砂塵煙……！」遠く戦闘の報告
誰も其の方向を見た
薄く棚曳く朝霧に白く大きく移動する砂煙……
ロー〻敵の増援部隊に違ひない
仲尾次の南側に迫る時はつきりと認めた　確かに
敵の増援だ　自動車に満載された歩兵　戦車も
体ってゐる
「撤退！」撤退命令を下達した
撤退を掩護する火器は僅かに4ヶのみ
整々たる撤退はもう夢である　左第一線は二年縦隊
となって第一次集結地点目ゲて走り出した
部隊の撤退後　煙に包まれた　兵の花屋印高々
東側台上に敵砲弾の落さてゐる
退路は真壁屋林道に敵兵(奥)を顧慮して交戦
斜面に進出した　兵達は先刻の元気は何所へか

弾丸が来ると其の場に伏せて仲々動かない
敵の一部は既に退路に迫つてゐるらしい
部隊は山地に入ると随つて概ね各小隊程度に分
れ任意の経路を集結地点に向つて前進し始めた
本部指揮班は第一小隊、第三小隊と行動を共にし軽
機を中心に要点より要点に躍進しつゝ前進した
途中　直ぐ後方で拳銃の様な射撃音を聞いて
皆々前進したが後方が続いて来ない
若干心配になつて分進地点で待つてゐると小入端（幸）
伍長や渡嘉敷兵長が巻脚絆の辺を泥々にして汗
だく〳〵息を切らしながら帰つて来た
「ああ、先刻はひどい目に遭ひました　先頭の方で弾丸の
音が聞えるので、新照屋雅牧が悪戯をして拳銃
でも撃つてゐるのだと思つてゐたら　すつかり敵の伏兵
に射撃されました」と
「損害はなかつたかい？」
「敵は二三名で後線に出てゐたので軽機で追つ
払ひました。損害はありません」

敵機はやはり眞北屋根の上空を舞ってゐる
爆撃機三機が何を迷ってゐるのか攻撃地点を爆撃し
始めた
時々我々の頭上にも来る　退路をもって陣点や集結地
点の見付かれば　それこそ一大事
[illegible]　夫々道端の木枝を折って偽装した方がよ
譜久川の三叉路に着いて朝食の乾パンを
喰ってゐると三々伍々と帰って来る　直ぐ上の森が集結
地点であるらし
直ちに敵の強大なる攻撃を豫想して陣点附近の藪を俺
を最重にする如く指示をした
朝食を済して敵機の動を見てゐると眞北屋の
住民の
「深長殿　近頃下の部落におりてゐる連中から早く
山からおりて来なさい　部落では米が食糧とか色
んな物資を配給と呉れて絶対に安全だそうです
我々も山に頑張ってゐますが早くおりて増産をし
譜久川の俺の上の　食糧もずいぶんなったし
方の良いと思ひます　どうでせうかね」

と半は上から降りたいと思はれる程に言動である

「そんなことを言ってはいけません 敵はいつも
どこに手を使ってます 敵らかに謀略的手段ですよ
民衆と軍隊との離反策です そう言ふ手に乗って
は駄目です 我々は如何な困難なる状況に立至って
も頑張らなくてはいかんです 国家は総力を挙げ
て戦ってゐるんですよ 天一号作戦の中止決も
勝つた事は出来ないでせう 勝つ故々までやろうじゃあり
ませんか 従ひ食糧が無くなっても石に喰り付
いてでも清く生きるようにやあーませんか」

大体以上の様な話をして辺長を通じ暫く久り避難
地迄の住民を指導させる様にー民 皆くーて〜〜歩行
攻撃隊の連れ味軍曹の外十数名を指揮して帰
つて来た

「どうだったか！」

「いや 巧い具合に行きませんでー民 途中 道を間違
つて到着が夜明けとなってーまひまー民」

「隊長は」

「隊長殿は一寸遅れて遅く後に来られます」

「やあ！御苦労様でした……」

「途中道を間違へる為め避難民の案内を用ふるいろいろと点したりして敵の我々の動を察知したらしくて遂に予定の攻撃の出来なくなりました」

「爆薬量が不足の為半分課河の橋は爆破しましたが又壊しても敵は何度も利用任破壊した初めです」

「敵は国境方面からする渡河点を二ヶ所作って居り、少し上流には鉄橋をかけてあるのでし所詮駄目でした」

「然し国境方面からの増援は兵力が少なかったと為喰ひとめました」

「集結地点に来て見ると戦場で紛失したと思はれて居たに兵力も先に着いてゐて大作整理は出来て居ると東に少し足りない（擲弾筒は西銘隊と一緒に撤退したらしい）」

「すると西銘隊はる予定の時間にかやってないから成功したのだな」

「最初の意気込みからして大分戦果は物かてゐるかも知れない」

「遂次集結して完了せる隊から順序に據点に帰した」

後から来る者の話では"敵は逐次兵力を増強し戦場附近の地域的包囲をして来た為離脱が相当困難に成り特に患者護送に任じてゐた者はその為殆んど全滅した"と聞く

羽地伍長は一人で駆け回って應急治療をやってゐる

解隊後防衛隊本部の陣地で晩食（朝食の残り）を

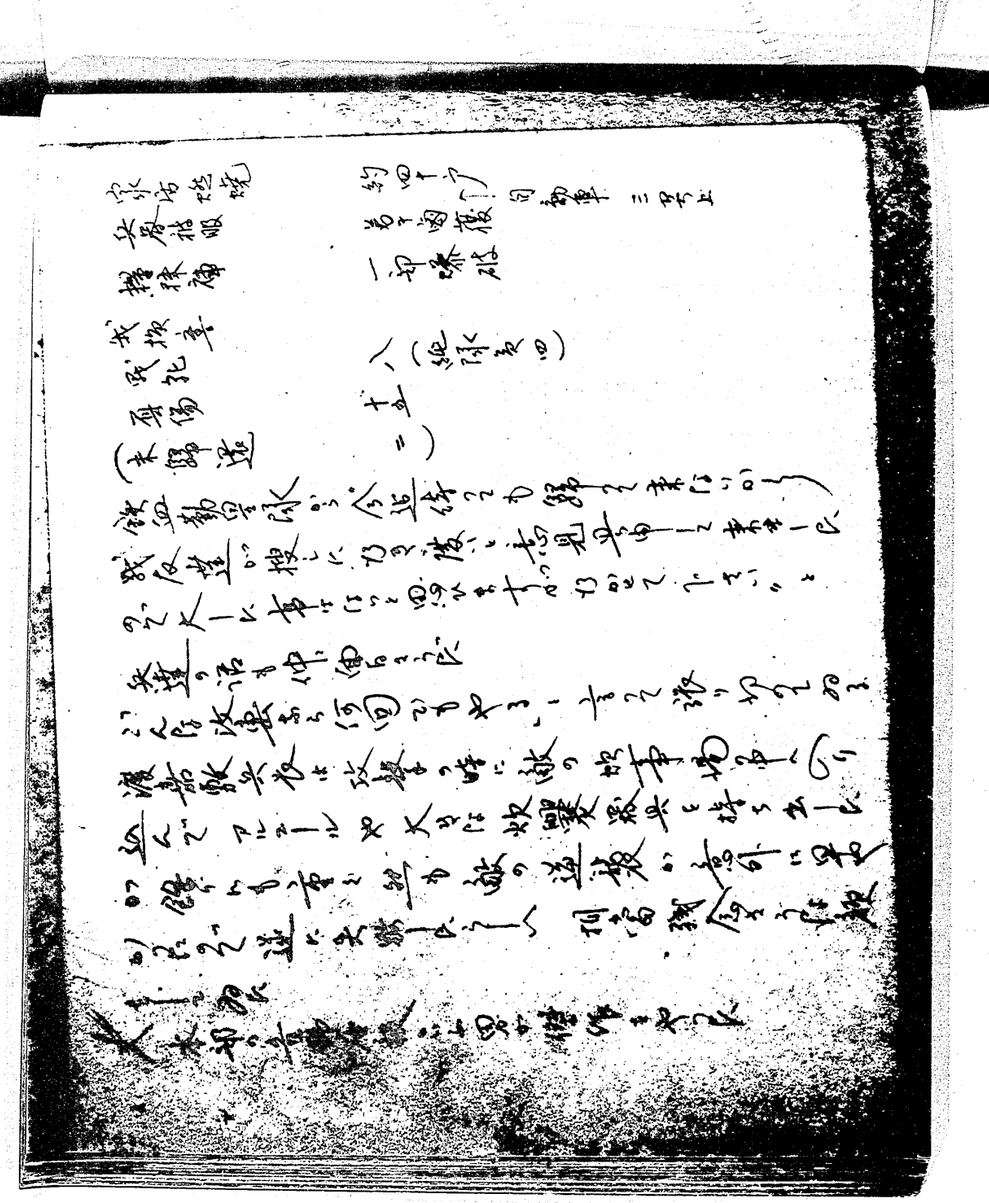
概況

白米の飯もあって呉れた戦果の煙草（ピスター）を御馳走になり今日の攻撃について色んな話を聞いて避難民のランプの件については最も皆憤慨してゐた そう言へば主力の方にも此の件が有る様だ"宮城は夜の小隊が分進して兵站線の川の"ダム"の所に来た"等仲尾次方向に一連の点灯が逐次点いてゐた――

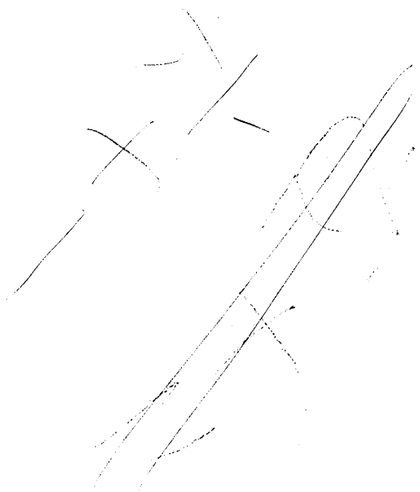
侯参では"敵兵無し"と云ふのに左側台上より所の銃撃を受ける予定の線まで進出し得なかった"という事実がある

雑談として本部に帰る 何所も今日の攻撃の

話で持ち切りである。
集結地点に着いて見ると兵達は書食をとり終は
装備した儘道路端で眠っている
人員と点検警備を見ると主力は集っているので警
理の着いた陣地に返る
三中隊の方が二三名足りない　負傷者を介護して後送
して来たのを見たと言う者が居たので就に近の内には
歸って来るだろう
本部に着くと上地報道班員が
浴衣姿で出迎えられ成功しておめでとう
庄さん　大体の話は先に歸った人もから聞きました
相当頑強な攻撃防ぎたのですね　尻の号令はどうでしたか
戦中指揮所に入ると西銘隊からの報告文書が今
日の戦果と共に置いてある
墓地屋稲嶺攻撃綜合戦果
人員殺傷　約七十名
弾薬庫爆破　二ヶ所
燃料庫　二ヶ所



此の男は教育期間から餘り映えない男ではあったが
彼は本部の後方警戒をしてゐた。本部の改善に
如何ってゐるかそこは知らずに松の木下で怠惰と
銃を構えて恰も初年兵教育其の儘の恰好で立哨
してゐた。其の時敵の後方四間部隊の一部の彼の
前面に散開したか何處らずの恰好で立哨の
びりと立ってゐる。敵は歩哨の見付けて射撃！と
来たかまさか敵とは成ってない
来たのかもしれぬ彼は
射撃を受けても例のぬき立哨してゐた。そして
誰だ無駄するな 俺だ俺だよ！と逆襲に
敵と見付けて慌て出し裏の茂みの中へ逃げ
込んで脱出して来たのだった。
三中隊の仲間の者も歸って来た。敵の攻撃も
明朝は夜である
なれで結戦以来の押し通しの緊張もやっと
挽回出来た。全負傷敵の半襲い激って来たった
戦死者更疊も地ねで微笑ひでゐるだろう



撤退し
敵の歩哨は呑気なもので、既に知れ
物音に驚いて大騒ぎに慌てゝみる時は手遅れに
爆破音！……はは何の障碍も防ぐ撤退し
攻撃開始
「敵軍自動車砲若くは攻撃は簡単ですが砲の
破壊は一寸大ゝ敷つと
出発に際し能くまで任務を統行出来る為已むを
得ない場合には他の攻撃目標と切り替へる
旨内容
命令。導路は敵の術略と
長き地点攻撃に於ける戦争の指揮と偉へ
能ずに出発し一路に入り変る支隊主力の保護中隊
準備する二六名のものが本部に出発し来た
於て明朝方に出発すべき特に設良情報は
敵を欺く為に迂回する

彼等の言によると大隊長から
全員商人の遊説等戦に為何中隊は○○に何中隊
は何所にと夫々集結、脱出に当っては便衣に着
換えて住民に紛れて乃部隊よりと称し兵器は出来
得ない時に使用する外用ひず何所かに隠して
置く様各地に分進せば一ヶ月位乃部隊は暫く止
農業に従事する事と
此の話に関して一同更に義勇兵
一作遊説戦をいよいよ一ヶ月の乃部隊出とは何の
捨て何の遊説戦か次に敵戦民一号
でのような事を以て敵戦に
作戦の兵士義を考へて見れば右の様な乃部隊は
択部のみも出来ない筈だ
支隊長の遊説計画もとんだ笑ひ草だ
是に関して部隊に強迫させることは為平山の
意思に反し支隊長の来ることから処置する
可しと其の旨伝達した

大隊長の命令を遵守するとつて間のない
都合の良い命令ばかりは聞きらしい もう既に
戰意を喪失してゐる敗殘兵である 外面だけは
内容の進歩的の為にうまく偽裝してゐるが
亦支隊として遊擊戰として何等の準備も
なしてゐない 小説的な進歩戰
を考へてゐるに過ぎない
どう考へて見ても兵器彈藥糧秣氏衆い
ものを破壞することは遊擊戰ではない
支隊長としても谷文岳に集結して口頭中旅兩地の
遊擊をやる心算であらうが初トからこんな調子
では到底駄目だ 當初の迎擊計畫からすれば大
變な相違である 兎に角初隊を谷文岳周
辺に止めて置くに限る
十九日夜 平山大隊の一部隊同じやうにやつて来た
永張り國旗隊の方に行きそうへ
第四さん八重岳はどうですか
〃 〃 進捗 艇船 艇長を殺けたよ

六475

「大砲は要らなかったそうですね」
「射撃に関する志願兵申込みもなかったのですね。きっと早く全国の
撤退を要求するやいかん。と言はれたんだ」と内心撤退
命令をもらったんだ」
「なぜ伊江島には一発も要らなかったのですね」
「そうだ」
「なぜ渡久地の方は」
「之は遊撃隊の関係で要てない」
「どうして伊江島の要てなかったのは神の輸送船位
要て沈めなかったのですか」
「要ったって大砲弾なぞ効果のないよ」
北「どうして撤退前に命令なくとも射撃をしなかった
のですか十六日には伊江島には上陸したんトやあるんか
「うん十六日の夜要った心算で居った所撤退命令
ともらいかく既日の夜 撤収 撤退
撤退をしたのならば」
「なぜ砲は撤収しなかったか」
「撤退 撤退 撤退」

「瑞穂は」
「そのまいだ」
「こんかるどうさ止をすか」
「きあどうーよろか 大隊長命令をもらってみるんだが」
「隊長とは意見が違わらー」
「支隊長の意見も成る程」
「支隊長とは何と云ふ」
「支隊長代理になってくれま
せんか」
「やや平山さん 同級生 支隊長 代理 なってくれま
せんか」
「そーして谷大尉 同期 部隊を纏めて
ひきい」
「そうーはいと 整理がつきませ」
「入れ代りまた代りして 部隊に急の命を告げた
来るこまる 絶食 ひきます」
「いいとて来るのもいる」
「何をと 部隊の数は」
「こんなものに 保って
他隊かないと」
「赤 月 見 を」
「部隊の数 意に及ぶ」
「多分 大きいぞ」
「我兵 許すふを 人 禁ずと 大事」

註 隊長は三十二の部隊と大隊長に
仮してしまって 自分が部隊をもって
行ったんだから
野戦したとよ 何も同級に 力 行 という
とは 同 支隊長と 代
支隊長 及の 来られる

帰り仕度

暫くして寺山大佐が入って来た。彼は飛行服を着て佐官用の刀緒をして威厳のよくへつて来た

「私は寺山といふものです……」と

當方としては赤の刀緒と飛行服着用の為隨分偉く見えて威圧を感ずる

「失礼ですが何歳ですか」

「ハッ五十五期です」

「何んだ五十五歳か俺も其所の北も五十五歳だ」

「あゝそうか俺も當作が五十五歳だと聞いて思ったんだ」

「すると五十五歳の寺山さんは」

「寺山さんは今自分の隊の方へ行ったよ」

「はあ上って休の」

「當作は特攻だそうだなあ」

「まん一番特別攻撃隊だ」

「三月三十の沖縄方面で知る限り隊員もの士官六名と一緒だ」

「まり三十の夜特攻機を引き出してエンジンを四発」

「の子と分るとの奴に銃撃されて一番乗りの人が内四発」

「地獄の縁者ー」

部下に先やらして実に残念だ　今度は様子を
陸上戦車をやろうと思うんだ。

「支隊長は」

「支隊長は俺と一緒に来たんだが古戦場の草葉
園の所ではぐれて一まつに丁度俺の夫人で
城宮兵衛といのと一緒に先に来てしまった 誰か
誰か名前も知らないが貴様の隊の奴らしかった
草葉園で敵の抵抗線にぶつかって交戦した
支隊長は急ぎまわって来ない 多分名護岳の方へ行って
俺が偵察して来ない 絶対企図を秘匿しようとするあまりだ
居ると思うが」

「あ、そうか
何しろ命令が徹底してみない奴道中隊にかからな
ければ作戦がんで通ってみるんだ
早く来て呉れると良いんだが……
もしも支隊長の企図は……矢張り名護岳と巷
地として選挙戦をやるといよ陸戦だったかい」
「選挙戦？　全く無駄な命令